

## インドネシアの狂犬病事情とフロレス島現地調査報告

川又 哲 (川又犬猫病院・北海道獣医師会会員)

石黒利治† (石黒獣医科医院院長・岐阜県獣医師会会員)



川又 哲



石黒利治

### 1 はじめに

1997年当時、北海道ではロシアから数多くの船舶が来航し、それに乗船して来た多数の犬が輸入検疫手続きを受けず不法に沿岸に上陸し、地元でトラブルを引き起こしていた。いわゆる「ロシア犬の不法上陸問題」である。犬は、夜な夜な放たれ、大半は船に戻るが、中には、船の離岸時にも戻らず、そのまま置き去りにされ、それらの犬が埠頭周辺に群れをなし、地元の飼い犬と喧嘩をし、中には通行人に咬みつく事件すら起きていた。同時期、6,000km離れたインドネシアのフロレス島では今日まで続く苦難が始まりつつあった。世に言う「フロレスの悲劇」である。有史以来狂犬病の災禍から免れてきたフロレス島に、500km離れた島から狂犬病に罹患した犬が持ち込まれた。この恐るべき感染症は瞬く間に全島を侵食し、人への感染が始まっているとの情報も

たらされた。フロレス島を北海道に置き換えれば、まさに、北海道はフロレス島と同じシチュエーションにあることから、当時は、心寒からしめるものがあった。今回、北海道獣医師会、岐阜県獣医師会の支援を得てフロレス島に赴き、現地調査を行った。以下はフロレス島に於ける狂犬病侵入の真相とその後の経緯、そしてインドネシアの狂犬病事情の調査報告である。

### 2 インドネシアの地勢とフロレス島

インドネシア共和国は、5,000平方キロにも及ぶ広い国土と大小17,500もの島々で構成され、2億4千万人の人口を有する世界第4位の巨大な多民族共和国である。主な島は、首都ジャカルタのあるジャワ島、スマトラ島、セレベスともいわれるスラウェシ島、マレーシア側からはボルネオと呼ばれるカリマンタン島、日本人にもリゾート地として有名なバリ島などが馴染み深い。

目指すフロレス島は、さらに東の、行政区画としては東ヌサ・トゥンガラ州の中にある東西に細長い島である。ちなみに、東ヌサ・トゥンガラ州の州都は南のチモール島のクバンである。最近、このチモール島の東半分が独立運動の後、東チモールとしてインドネシアから独立したことでも有名である(図1)。

### 3 インドネシアの狂犬病

フロレス島に入島する前に、首都ジャカルタで、インドネシア政府の畜産局から、狂犬病事情について、カンファレンスを受ける機会を得た。ここで得た知識は、その後のフロレス島での現地調査に大変役立った。対応されたのは、インドネシア畜産局の家畜衛生部局のセダルモノ次局長である(図2)。以下は、我々の質問と回答である。

**質問1：インドネシアの狂犬病の発生はどのような状況にあるのか**

**セダルモノ次局長** 33州のうち、スマトラ、スラウェシ、カリマンタンなど23州で狂犬病が発生。ジャワ島もバンドン市周辺は発生しているが、中部ジャワ、東ジャワに波及しないよう全力で阻止している。バリ



図1 インドネシア フロレス島

† 連絡責任者：石黒利治 (石黒獣医科医院院長)

〒509-0207 可児市今渡1618-47

☎0574-62-8020 FAX 0574-62-8062 E-mail : ishivet@ma.ctk.ne.jp

表1 インドネシアの人と犬の狂犬病の発生数

	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
Human							84	109	147	136	87	
Dogs	—	903	858	488	227	653	425	347	1,169	349	2,645	260 (June)

出典：インドネシア畜産局資料

島は世界的なリゾート地なのでここだけはなんとかしても死守したい。

インドネシア国内では、100万人に対して、110人が狂犬病に感染しているおそれのある犬に咬まれる計算である。また、1,000件咬まれると、その内の7件が実際に狂犬病を発症し死亡している。この死亡者は、すべてがワクチンを接種したという例ばかりではなく、まったくワクチンを接種しない人、また、接種があまりにも遅かった人、さらには、祈祷、民間療法などの前時代的な方法に頼った人が含まれる。暴露後、速やかにワクチンを接種した人のほとんどは何事も無く助かっている。

1997年にフロレス島に狂犬病が侵入するまでは、東ヌサ・トゥンガラ州のすべてが狂犬病に対して完全にフリーであった。また、それまではワクチンネーションはまったく行われていなかった。

**質問2：インドネシアの狂犬病撲滅に対する戦略、または、国策のようなものはあるのか**

**セダルモノ次局長** インドネシアでは、感染症は狂犬病だけではない。国策として、12の条件を定め、優先順位を決めて実際の施策を行っており、その内の4つの重要な条件、すなわち、感染の速度、死亡率の高さ、経済的なダメージの大きさ、人間に対する危険性の度合に照らし重要度が決められている。その結果、特に狂犬病、炭疽病、ブルセラ病、高病原性鳥インフルエンザ、それに豚コレラが国の重要な疾病として扱われている。

国策としては、フロレス島のような、狂犬病フリーの地域にパンデミックが起こった場合、まず、犬の数を減らすエラディケーション作戦をとり、その後、残ったものに対して、ワクチネーションを行う方向で考えている。

**質問3：ここ10年の、インドネシアにおける人と動物の狂犬病の発生数はどの程度か**

**セダルモノ次局長** 表1参照。年間約100名が死亡している。犬については、ここ数年は増加傾向にある。98%が犬で、家畜の発症例はない。残る2%は飼育猫と猫である。野生動物やげっ歯類の発症は確認されていない。コウモリの抗体は今の所、確認されていない。



図2 インドネシア畜産局にてセダルモノ次長（中央）から説明を受ける

**質問4：インドネシアでは、現在も、狂犬病の発生は続いているが、撲滅を阻んでいる要因は**

**セダルモノ次局長** 狂犬病防御のネックはなんと言ってもワクチンだ。ワクチンの生産は、畜産総局予算の中にある僅かな狂犬病対策費の中から支出されている。インドネシア全体で毎年250万頭分が必要であるが、40万頭分しか生産できていない。スラバヤにある施設は、生産に余力があるにも係わらず、予算が無いために作ることができない。不足分は、地方財政の中から作ることになっているが、実際には、地方の予算で作られたためしはない。この僅かな40万頭のワクチンの3分の1をフロレス島に向けているが、それでも焼け石に水の状態だ。

経口ワクチンに期待している。技術的に完成すれば、狂犬病撲滅の有効な手段として利用できるかもしれない。しかし、少しでも欠陥があれば、ジャングルを抱えたこの国には、将来的に取り返しのつかない問題が引き起こされる可能性もある。

**質問5：飼い主がいる犬として何頭の犬が飼育されているか**

**セダルモノ次局長** 詳しい犬の飼育数のデータは持ち合わせていない。それは、インドネシアの伝統的な犬の飼育方に原因がある。ほとんどの犬が放し飼いのため、カウントができないという問題もある。しかし、国の人口が2007年で2億4千万人という事なので、

その比率から、約1,200万頭（2007）という数値を基礎数として資料の算出を行っている。

**質問6：インドネシアでは、飼い主のいる犬に対して、登録制度があるのか**

**セダルモノ次局長** 犬のオーナーに対しての強制された登録制度はない。しかし、1977年の、動物疾病の防止、コントロールと絶滅に関する政府規制No. 15、また、1983年の政府規制No. 22により、法律に基づいた強制的な規制制度として、狂犬病のワクチンプログラムを実施している。

**質問7：飼い犬への狂犬病撲滅のための定期的なワクチン接種は全国規模で実施されるか**

**セダルモノ次局長** インドネシアにおいて狂犬病ワクチン接種のポリシーは、全体の州の中で、犬、猫と猿に対して、むしろ、狂犬病に侵されつつある地域や、歴史的に狂犬病フリーの地域（Java州も含む）を優先的に選択し実施されるもので、全国的な、しかも、全頭的なワクチンプログラムといった認識のものではない。最も大切な事は、狂犬病フリーの地域に対して、狂犬病の侵入を許さないという事を最重要課題として努力をしている。全国的には、9月から10月に掛けて大量にワクチネーションが実施され、翌年の2月までに終了する。

**質問8：飼い犬の狂犬病のワクチンを接種率ほどの程度か**

**セダルモノ次局長** 飼い犬の狂犬病ワクチン接種の比率は37～45%（2007）と認識している。

**質問9：飼い主が支払うワクチネーションの費用はどの程度か**

**セダルモノ次局長** 全国レベルでの狂犬病の感染防止と撲滅プログラムにおいて、都市部の開業者がワクチン接種を行うケースでは、政府と州の畜産局が側面からサポートしている。具体的には、政府からのワクチンの供給は原則無料だ。それに使用する器具、資材などの支援もある。しかし、開業獣医師のコストについては使用するワクチンの種類（国産か、輸入か）、また、必要経費や技術料が開業者の裁量によって様々な段階があり、すべてを把握はしていない。また、開業獣医師が避妊手術をすると、政府からわずかではあるが助成金が出ており、インドネシア政府は奨励している。

**質問10：ワクチン接種プログラムの責任主体及び実施スケジュールの企画は誰が行っているのか**

**セダルモノ次局長** 狂犬病のワクチンプログラムは、中央政府畜産局の指導の下、それぞれの地方の事情を勘

案した上で、地方自治体の長が責任を持って計画を立てている。

**質問11：日本では、政府の指導の下、ワクチンプログラムは獣医師会に委託され、獣医師会は、開業獣医師を主体に全国レベルで狂犬病ワクチンを接種するが、貴国では、ペットを中心に診ている開業獣医師を狂犬病のワクチンプログラムに参加させる計画はあるか**

**セダルモノ次局長** 開業獣医師に対しても、ワクチンプログラムに参加し、活動状況を報告させるようにしている。しかし、国情もあり、どこにどれだけのワクチンをいつ使うかは、政府の強い意思が反映されなければならない、計画段階からの参加ではない。

**質問12：人が狂犬病の疑いがある犬に咬まれた場合、免疫グロブリンを使用するか、暴露後のワクチンプログラムはWHOが推奨する方法（WHOプログラム：0、3、7、14、30日目にワクチン接種）に従って、行うのか**

**セダルモノ次局長** 我々は、畜産局であるため、動物の取扱については、スタンダードな方法を提案し実施しているが、人間が狂犬病に咬まれた場合の取扱については、保健省に聞いていただきたい。

（著者注：保健省で聞き及ぶところによると、人の暴露後のワクチン接種については、Zagleb方式という、アフリカのザグレブで確立された0（1cc）、7（0.5cc）、21（0.5cc）日目に、計4ドースのワクチンを打つ方法が国是として定められ、国民医療センターのすべては、この方法に従ってワクチネーションを行っている。免疫グロブリンについては、ルーチンな暴露後治療の中には、組み込まれておらず、本人の強い希望があれば、特別処置として免疫グロブリンが使用されている。）

**質問13：犬が狂犬病の疑われる臨床症状で死亡した場合、通常、どのような検査がなされるか**

**セダルモノ次局長** 地方自治体とDICの研究所で処理される。人を咬んだ犬は、14日間、地方自治体により観察され、その間に、犬が死んだ場合は、脳が摘出され、研究所に送られ、セーラーテストかFATで検査される。フィールドレベルにおいて、検査が必要となった場合は、いくつかのエリアで、常に、セーラーテストができる体制にある。

**質問14：貴国と日本の関係を、次局長はどのように考えるか**

**セダルモノ次局長** 日本のJICAには、たいへん世話に



図3 路上を徘徊する犬。飼い主はいても係留はされない。

なっている。インドネシアでは、全国に家畜の検査所が7カ所ある。そのうちの2カ所、すなわち、北スマトラのメダンにあるもの、バンドランブンにあるものはJICAの援助で建設された。さらに、現在、新たに8カ所目を西ジャワ市のスパンに作るプログラムが進行中である。また、これとは別に、グヌーシンルーにあるNVDAL（薬物検査所）もJICAの支援を得ている。私達の国にとっては、たいへん有り難く感謝している。

以上、畜産局衛生部での聞き取り調査で次のとおり数々の矛盾点が浮かび上がった。

- ① フロレス島での狂犬病発生時、島民人口150万に対して島内には60万頭以上の犬の生息が報告されている。この割合をインドネシア全国に当てはめれば9千万頭以上の犬がいる事になる。フロレス島の犬の密度が極めて高い事を考慮しても、飼い犬数、1,200万頭の数字には根拠がないと思われる。
- ② 畜産局はインドネシア国内で必要とされる狂犬病ワクチンは250万ドースと説明している。70%の社会的免疫率を維持するためには840万ドースが必要であるはずである。
- ③ 一方都市部の市民の間で国内生産ワクチンに対する信頼度は低く市中の動物病院では輸入ワクチンが多く使われている。畜産局が言う飼い犬の免疫率の平均40%を当てはめれば480万ドースのワクチンがインドネシア国内で使用されている事になり、国内生産量40万ドースを差し引いて440万ドースが輸入、使用されている計算となる。

#### 4 フロレス島での現地調査

フロレス島は、赤道直下の南緯8度で東西にサツマイモを細く長くしたような島である。人口約150万人。その70%はカトリックで、後は、プロテスタント、ヒンズー、イスラムを合わせて30%である。長さとは幅は350キロと60キロで、その西端にはコモドドラゴンで有名



図4 フロレス島のゴミ捨て場をあさる豚。この国では豚も犬も放し飼いである。

なコモド諸島があり、東端には、狂犬病が始めて侵入したラランツカという港町がある。島のあちこちには火山が点在し、2,000メートルを超す活火山もある。それらを避けながら島をジグザグに横断する一本の交通路が、唯一、文明への足掛かりで、それを頼りに山岳集落が226も点在している。電気が普及している所帯は都市部を中心に約20%である。フロレス島では、ココナッツ、バナナ、マンゴーなどのトロピカルフルーツ、コショウなどの香辛料の生産や沿岸漁業も盛んで、狂犬病さえなければ、さだめし、スパイスアイランドと呼べる犯罪の少ない豊かで平和な美しい島であろう。

調査団は、ジャカルタからバリ島、さらには名も知らぬもう一つの島を経由し、12時間を費やして、フロレス島の東部に位置するマウメレという港町に入った。

##### (1) 狂犬病の侵入地、ラランツカ

狂犬病の侵入地、ラランツカは、マウメレからさらに、100km東に位置する小さな港町である。40℃近い気温の中、以前の火山噴火で吹き飛ばされた黒色の巨岩の間に火山灰を轆き詰めた悪路を走ること2時間であった。車窓に広がる風景は、ココナッツとバナナの林の中に、竹とバナナの皮で囲まれ、バリ牛と呼ばれる赤い牛、まだら模様のヤギを飼う民家が点在する。

ラランツカ港は、20トンほどの集魚灯をつけた漁船が所狭しと並び、レストランを中心に3、4軒の店舗が並ぶ小さな漁港だ。道端には名も知れぬ極彩色の熱帯魚が発泡スチロールの上に無造作に並び売られている。魚種を見る限りでは沿岸漁業は豊かなようだ。

帰り道、2時間あまりの道程の中で、夕闇の車のヘッドライトに現れては消える、約100頭を超える野犬の姿が印象的で、聞くところによると、島全体のすべての犬がこの様に放たれているとのことだ(図3、4)。

##### (2) フロレス島の犬

フロレス島の住民にとって、犬の存在は、次の3点で

表2 フロレス島の狂犬病による経年の人の咬傷事故数と死亡数

	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	Total
Human Death	0	10	25	61	11	8	6	7	21	7	5	4	165
Dog Biting	6	681	497	2,438	1,187	1,186	1,392	1,298	3,101	1,808	3,148	1,093	17,835

出展：Dr. マリア・ゲウォンのプレゼンテーション資料



図5 フロレス島畜産局にて  
(中央の眼鏡の女性がDr. マリア・ゲウォン)

大切な役目を果たしている。第1は、高性能なセキュリティシステムの担い手である。都市部周辺だけしか電気が行き渡っていないフロレス島では、夜は全島が漆黒の闇となる。そんな中で、何よりも頼りになるのが、家の周りに放たれ警戒してくれる犬達である。彼等は、音、光、臭い、に対しての優れたセンサーだ。その意味では高性能なセキュリティシステムに守られて生活をしていると言っても過言ではない。第2が高級食材である。犬肉は、牛、豚、鶏よりも高級な食材である。誕生日、結婚式、また、11月の感謝祭、そしてクリスマスには、必ず、犬肉が供される。また、時には、売買の対象として市場に出回ることもあり、いざという時の食料と換金物資になる。第3が、ペットである。遊び道具の無い島の子供たちにとって、犬は、時には自然を学ぶ先輩であり兄弟となる。そのため、狂犬病で亡くなる人の半数は15歳以下の子供である。

### (3) Dr. マリア・ゲウォンとフロレス島畜産局

ジャカルタ畜産局からの指令で、フロレス島の狂犬病防御の責任者であるDr. マリア・ゲウォンが、勤務地チモール島の州都クパンから、フロレス島の畜産局まで出向き、我々調査団の訪問を歓迎してくれた(図5)。Dr. マリア・ゲウォンは、1997年の狂犬病侵入当初から、インドネシア政府の職員として、フロレス島の狂犬病撲滅に携り、現在も、対外的にはすべての責任者である。調査団は、フロレス島の畜産局で交歓を行った。まず、日本からは、①狂犬病の歴史的な背景、②現在の狂犬病予防プログラムの現状、③北海道における「ロシア犬の

不法上陸問題」について、簡単なレクチャーを行った。

### (4) フロレス島への狂犬病侵入の顛末

Dr. マリア・ゲウォンから、フロレス島への狂犬病侵入の顛末、その後の展開、現状、解決すべき問題点などをつぶさに聞いた。1997年の11月のある日、約500km離れたスラウェシ島のバトンから、小さなボートに乗せられて、フロレス島の東端のランツカに2匹の犬が連れ込まれた。うち1頭はすぐ死亡したが、他の1頭は周りの犬に咬み付いた。これがこの島への狂犬病侵入の発端である。フロレス島では、犬は、牛、豚、鶏と並んで、高級食材として扱われ、11月の感謝祭やクリスマスには、決まって、犬肉を食する習慣があることから、その商品として搬入されたと考えられている。1997年の時点では、人の発生がないために、狂犬病の侵入は気付かれなかった。この年には合計6件の咬傷事故が発生している。1998年の2月になり、東端のランツカ港の近くのサロタリ(Sarotari)という村で、初めて、一人、犠牲者が出た。時は既に遅し。狂犬病は、周辺の犬を汚染してしまっていた。この年だけで、681件の咬傷事故と10名の方が亡くなっている。

### (5) 46万6千頭の犬撲殺命令

1998年に入ると、この島は、世界中の医療関係者の注目の的となり、世界保健機構を中心に救いの手が集まった。日本からも、JICAのスキームでフランス製のワクチンが無償贈与され、初動対応に役立てられている。1998年の時点で、医療や獣医療関係者が、島の政治的、宗教的なオピニオンリーダーの意見を取り入れ、彼等に対する配慮の下に下した結論は、東ヌサ・トゥンガラ州のすべての犬を撲殺するというものだった。周到な教育キャンペーンの後に、実施されたプログラムの結果は、フロレス全体で1977年に636,015頭いた犬の飼育数は、2003年には、169,035頭に減っている。差し引き466,980頭の犬が撲殺により処分されたとするオフィシャルな数値である。Dr. マリア・ゲウォンの説明と他の文献の記述を総合すると、大半は飼い主に撲殺されて食べられ、または売られ、自分で殺せないものについては、警察、村の首長、軍人などの立会いの下に銃で射殺され捨てられたとされている。また、なぜ最初からワクチン接種による防御法を選択しなかったかとの疑問に関しては、この島の犬の大半がフリードックであり、さらに、ワクチンを安全に運ぶクーラー、シリンジなどの資材、ワクチンの接種技術者、電力そのものもこの島には存在

しなかったのである。

### (6) 最悪の事態

最悪の事態がこのフロレス島を襲った。それは、次々と犬が売られていった先に狂犬病が発生し、犠牲者が始まったのである。1998年6月には、マウメレのあるSikka地区に、1999年には、ほぼ中央部のEndeに、同じ年に、西隣のNgada地区にも現れた。2004年には、西端のLabuanbajoにも犠牲者が出るに至り、ついには、フロレス全島が狂犬病の病魔に覆い尽くされた。

表2には、1997年の狂犬病の発生当初から2008年6月までの人の死亡数と犬の咬傷事故数が載っている。これは、Dr. マリア・ゲウォンに提供いただいたものであるが、フロレス島の狂犬病に関しては、世界的にも最新の貴重な情報ではなからうか。

表からも、発生は衰えることなく続いており、狂犬病のエピデミックを押さえ込むことができなかつた姿が窺われる。また、犬の狂犬病による死亡数は載っておらず、咬傷事故数が載っている。これは明らかに、検査体制が整っておらず、どれほどの狂犬病犬がいるかは不明であることを示唆している。この12年間で、犬の咬傷事故数が17,835件は年間1,500件、1日では4件がなんらかの形で咬傷事故が起こっていることを示している。かつて著者らは、日本の咬傷事故数を調査した中で、180万の札幌で55件、30万の函館で13件であった。押しなべて考えるに、異常なのはむしろ日本の数字である。その理由は、日本では狂犬病が存在しないとして、誰も小さな咬傷事故を行政に届け出たり、暴露後のワクチン接種をしないことから数値が上がってくることはないのである。改めて、狂犬病の清浄国であることの幸せを噛みしめたいものである。

結局、この島は、2008年現在、17,835件の咬傷事故の結果、165名の尊い命が失われ、今も、これからも常に狂犬病の恐怖に慄きながら暮らす悲劇の島となったのである。

## 5 世界に忘れ去られたフロレス島と浮かび上がった問題点

フロレスに対する世界の関心も、2003年頃から次第に影を潜め、現在はすべてがインドネシア政府に委ねられ、孤立無援の状態だ。今回の調査の結果では、解決の難しい問題がDr. マリア・ゲウォンとの議論の中から浮かび上がってきた。

- (1) 資金が極端に足りない。地方財政の予算は、定期的なワクチネーションを行うには、あまりにも少なすぎる。
- (2) 犬の数が多すぎてカウントできない。犬の生息数が高くすべてが放し飼いであるため、その数は誰も正確には分からない。1件の家で8～10頭犬を飼う住民も多い。時々、森から出てくる犬を狩り、食材に販売さ

れたりすることもある。

- (3) 島から島への犬の移動は禁止されてはいるが、事実上守られていない。この国では、狂犬病犬が、自由に島を移動していると役人は危惧している。

- (4) 獣医師とパラメディカル(補助員)の数が足りなく、ベテリナリープログラムを遂行することが難しい。

- (5) ワクチネーションを実施するための、住民との連携があまり上手くいっていない。

ワクチンを接種しに行くと、犬を隠すこともある。自国生産のワクチンは住民には信用されてはならず、「ワクチンを接種すると狂犬病になる」などの“うわさ”もあるらしい(現地人から直接、著者らが聞いた話)。

- (6) ベテリナリープログラムを実施するには、クールボックスやシリンジなどの資材、技術者が足りなく、ワクチンをクールに保つための電力すらない。

- (7) 住民の大半(60%)は、文字を読めない。そのため、自治体の施策は、“うわさ”として村落に流布され、結果として、政府に対する不信感の種となり増幅する。

- (8) 電気がないから、通信手段が何も無い。A地点からワクチネーションを予定していたB地点に、天候や、様々な理由で移動できないことがあっても、B地点に、電気が無いため、その事を連絡する手段がない。次の日、改めてB地点に行くと、住民は怒っていて二度と犬を連れて集まる事はしなくなる。

- (9) 住民は殆どお金を持っていない。国から支給されるワクチンは、原則無料である。しかし、人件費や設備費が掛かり地方財政への圧迫が激しく、やむなく、日本円で10円程度のワクチン代を村民に要求すると、マンガーや野菜を差し出す者がいる。

この島では、通信手段が完備されていないため、未だに、“祈祷”や“うわさ”が幅を利かせている。Dr. マリア・ゲウォンの話では、一時期、ストリキニーネを使用して犬を処分したが住民の事故を心配し中止した。その時、住民の報復を恐れ、役人が頭から黒い布を被って作業したため、それが“ニンジャ”がいるとの“うわさ”として伝えられ、それが、自分達の平和をねたみ、脅かすものの化身となって住民の間に、今でも“いた”、“見た”として“うわさ”が生きているとのことである。

## 6 おわりに

熱帯直下に横たわる350kmほどのフロレス島で、狂犬病の実態調査を行った。日本のように、登録制度と年1回のワクチネーションが義務付けられ、すべての犬が室内飼育か係留して飼う環境とはあまりにも違う異次元の世界があった。2007年現在、この島には、20万3千頭の犬が放れたまま、ヤシ林の中にフリーな状態で生存

している。全島的なワクチネーションプログラムがある訳でもなく、60%が文盲の住民と行政との信頼関係も薄く、気温40度、20%の電力普及率の中で、今も続く狂犬病の脅威に悪戦苦闘している彼等を、私達は“反面教師”と呼ぶべきではない。むしろ、彼等は世界にも類を見ない最悪の条件と環境の中で、最大限の努力をし、発生数を現在の状態まで低く抑えている老練なファイターである。今後の成果に期待すると共に、この国の狂犬病の発生は、フロレス島だけの問題ではなく、広く国際的な支援の下に、全地球的規模で対策を考えるべき時であると痛感した。改めて、狂犬病予防注射の重要性和、清浄な大地で暮らす私達日本人の幸せを噛みしめたい。

稿を終えるに当たり、温かいご支援をいただいた岐阜県獣医師会、北海道獣医師会、同会金川弘司顧問、JICAの畜産アドバイザー下平乙夫氏、インドネシア保健省、農業省畜産局、フロレス島畜産局、東ヌサ・トゥンガラ州畜産局ならびに狂犬病対策責任者であるDr. マリア・ゲウォン、NVDAL (薬品検査所)とその職員であり通訳していただいたイダ氏に、この場を借りて心から感謝の意を表したい。

#### 追記

この原稿を日本獣医師会に送付した2月上旬現在、インドネシア政府が狂犬病の進入を死守するとしていたバリ島で4名の狂犬病の犠牲者が発生している。インドネシア政府はバリ島のすべての犬に狂犬病ワクチンを接種することで対策を取り始めているが、フロレス島のレポートで述べた通り、この国には犬を繋いで飼う習慣は無い。我々の想像を絶する苦難が予想される。日本を含めた広く国際社会の支援が望まれる。

#### 【参 考 資 料】

- [1] Caecilia Windiyarningsih, Henry Wilde, Thomas Suroso : The Rabies Epidemic on Flores Island,

Indonesia (1998-2003), J Med Assoc Thai., 87, 11, 1389-1393 (2004)

- [2] Henry Wilde : Flores island rabies outbreak, Indonesia (December 3-10, 2000), Clinical Infectious Diseases, 2003, 37, 96-100 (2000)
- [3] Henry Wilde : Rabies 2007 : perspective from Asia., Asian Biomedicine, 1, 345-357 (2007)
- [4] Robert E Dedmon : Maddog and Englishmen, Asian Biomedicine, 2, 27-34 (2008)
- [5] Veera Tepsumethanon : Six Criteria for Rabies Diagnosis in Living Dog, J Med Assoc, Thai, 88, 419-422 (2005)
- [6] 青木恵理子 : Rabies, Ninja and Vaccination : Embodied imagination and modern system in Flores, Indonesia, 国際社会文化研究所紀要, 第7号, 269-281 (2005)
- [7] 森山浩光 : インドネシアの狂犬病, 日獣会誌, 59, 709-714 (2006)
- [8] Policy Program for Rabies Eradication : インドネシア農務省畜産局資料
- [9] Maria Geong : Rabies Situation and Control in Flores and Lembata, インドネシア, 東ヌサ・トゥンガラ州, 農務省畜産局資料

#### 【略 歴】

##### 川又 哲

- 1963年 帯広畜産大学獣医学科卒  
川又犬猫病院院長  
1998年 博士(獣医学)取得

##### 石黒 利治

- 1972年 帯広畜産大学獣医学科卒業  
石黒獣医科医院院長  
1996年 岐阜県獣医師会監事  
1998年 岐阜県獣医師会理事  
(以後, 2002年~現在)